



#11

幼なじみのハレハモンヨン

著・藍澤たすく
イラスト・かもめ遊羽



「なー、そろそろ休もうぜー」

「ダメよ、たっくん！ 5分前に休憩したばっかりでしょー！」

俺の前で両手を制服姿の腰に当てたまま、頬を膨らませているのは幼なじみの由美。

黒縁メガネに三つ編みのおさげ、といいかにも優等生サマな出で立ちだ。

まあ、実際学年首位の優等生サマなんだけどさ……。

「たっくんの勉強、おばさんとおじさんが留守の間はしっかり見るよう言わてるんだから！ ほら、さっさと問2ー！」

由美が数学の問題集をこれでもかという勢いで突きつけてくる。

せっかく冷房の効いた俺の部屋もこれじゃ暑苦しいことこの上ない。

テレビもゲームもPCも勉強の邪魔だと全部由美にコンセント抜かれたし……。

だいたい俺、数学は苦手なんだよな。

「苦手だから頑張って勉強するんでしょ！ まずどこが判らないか判らないとあたしも教えてあげられないでしょ！ そうでしょ！？」

「うぜえ……」

「何か言った!?」

「いーえー、何も言つてませーんーオレ数学チヨーダイスキー！」

由美の目が三角になつてきただので、俺はしぶしぶ問題集に戻る。

あーあ、せっかく親父とお袋が海外行つてる間は羽伸ばせると思ったのに……。大誤算だったな。

ちなみになぜ俺を置いて旅行してたのかというとお袋曰く「15回目の新婚旅行だからー♪」だそうだ。もうアレ過ぎて突っ込む気も起きない。

しかし由美の奴も親父とお袋の頼みだからってわざわざ自分の休み潰してまでウチに来るこないよな。何かにつけ俺の世話を焼こうとするんだから……お前は俺のお袋かつて言うんだよ。

「なあ、由美」

「なにに、どこが判らないの？」

「いや、ちがくてさ。なんでお前そんない一生懸命俺に勉強させようとするの？」

「なんつて……それはおばさんとおじさんにそう言われたから……」

「それだけ？」

「！ それは……」

急にもじもじと拳動不審になる由美。

人差し指の白い指先がせわしくなくフローリングの上に「の」の字を描く。

なんだ？ 一体何がしたいんだお前？

「だって、たっくん、S高狙ってるんでしょ？」

「うん、まあ一応な」
「でも偏差値全然足りてないでしょ」
「……まあ一応な」

「だから頑張らないと、あたしと一緒にS高行けなくな……」
「ん？」

「な、なんでもない！ と、とにかく頑張つてS高行つておばさんたち安心させてあげなきや

親不孝だよ！ そうでしょ！」

「へーい……」

何故か真っ赤になつた由美にばんつ！ とローテーブルを叩かれて俺は洪々と問題集に戻つた。

「あっ」
「なんだよ？」

「たつくん、えり曲がつてる！」

「いいよ、どうせお前と俺しかいないんだし」

「良くないの！ そういうだらしないところがだめだつて言つてるの！ あ、ちょっとこつち寝癖ついたままじゃない！ もー、ほんとにだらしないんだからー」

「だから別にいいつて言つてるだろー。ん？」

由美が自分の学生鞄からクシを取り出した拍子に何かがこぼれ落ちた。見るとそれは小さな、10センチくらいのへちゃむくれの人形だった。小人のようだが、目と鼻の位置がむちやくちやでまるで福笑いだ。

「なにこれ？ ストラップ？ にしても変な顔だな」

「あ！ か、返してよ！」

「おつと！ こいつを返して欲しかつたら俺様に30分休憩を許すんだな」

「たつくんずるい！ つていうか、本当にやめてよ！ それ大事な物なんだから！」

「取り返したかつたらここまでおいでー！」

俺はおどけながら人形を頭上にあげて、そのままドアから外へ逃げ出す。

「もおー本当に怒るわよー！」

「へへっ、悔しかつたらここまでおい……」

「あつ……」

部屋から出たところにある階段につながる廊下で、へちゃむくれ人形争奪戦を繰り広げていった俺らは、バランスを崩してそのまま落下しそうになる。

「あぶな……」

俺は手を伸ばして由美を掴もうとするがタイミングが合わず、逆に由美の上に覆い被さるような体勢になつてしまつた。

「……！」

せばまつた視界を階段と天井がめまぐるしく行き過ぎる。いや、俺たちが回転して落ちているせいで、そう見えるだけなんだろうけど……。

——ダンツ

1階の床に叩きつけられた音を最後に聞いて、俺の意識はブラックアウトした。

「てててて……」

どれだけ時間が経ったのだろう。痛む後頭部を押さえながらゆっくりと起きあがる。目に入った居間の時計はまだ落ちてから10分ぐらいしか経過していないことを教えてくれた。

「……由美！」

意識がようやくはつきりしてくるのと同時に、俺は一緒に落ちた幼なじみの存在を思い出した。

あわてて周囲を見渡すと由美は俺の横でぐつたりとしている。

「おい、由美！ 大丈夫か？！ 由美！ 起きろって！」

「ん……」

俺が肩を揺すると、由美はゆっくりと体をくねらせ始めた。

良かつた、どうやら、頭とかは大丈夫みたいだな。

「ごめん、由美、悪かった。はしゃぎすぎたわ……どつか痛いことかな……」

「ふえ……」

「ふええええええ～～～ん！」

由美がいきなり泣き始めた。それはもう三歳児のようだ。盛大に、激しく。

「どうした、由美！？」

「みえないよー、なんにもみえないよー！ こわいよー、ママー！」

「何も見えない……って、あつそーか！」

俺は慌てて床に転がっていた黒縁眼鏡を拾い、それを由美にかけてやる。

「あつ……みえりゅ……？」

由美はびたりと泣きやんできよどんとした顔になつた。

まるで魔法にでもかけられたような表情だ。

そして。

「おにいちゃん、だあれ？」

「はあ？」

「あれ？」……たっくんのおうち？」

由美はあどけない表情できょろきょろと周囲を見渡している。
えーと……これは……もしかして……。

「由美さ、お前いまいくつだったつけ？」

「ゆみ、さんさい！ もうすぐよんさいだよ！」

由美はにぱつと笑うと、元気よくそう応えた。

（……やべえ、頭打って中身が幼児に戻ってる!?）

三歳ってことは幼稚園に入つたばかりつてことか……。つていうか、早く救急車呼ばないと！

「あー、すごい！ ゆみ、おねえさんになつてるよ！」

携帯に手を伸ばしかけた俺の耳に由美の無邪気な声が届く。

見ると由美はリビングに置いてある姿見に自分を映してなにやら盛り上がりつていた。

「すごーい、すごーい！ ねえ、ゆみ、おねえさんだよ！ おっぱいもあるよー！ ママみたーい！」

「ちょ、おま、やめ……」

両手で自分の胸を持ち上げる由美を俺は慌てて止める。

あつぶねえ、今持ち上げすぎてちょっと制服からはみ出しそうだつたじやねえかよ、中身が！

「すごーい、いつのまにおねえちゃんになつたの？ ゆみ？」

「いつのまにっていうか、お前……」

「でもおねえちゃんになつてよかつた。だつてこれでもうゴウちゃんにいじめられないもん」

「ゴウちゃん……？」

あー、そういえば居たな、幼稚園の時にそんな奴が。

典型的なガキ大将タイプで、なんでも自分の思い通りにいかないと気が済まない奴だつたつけ。よく他の園児を泣かしまくつてたな。懐かしいな、今どうしてんだろ、あいつ。

「じゃなくて！」

思わず要らん過去を回想してしまつた。

「由美。お前、ちょっと今から病院に行つて頭見てもらお、な！」

「やだー、ゆみ、びょういんきらーい！」

「あ、おい、こら、待つて！」

病院^{びん}という単語に敏感^{びんかん}に反応して由美はリビングを逃げ回り始めた。イスを倒したり皿や花瓶^{はいん}を割つたり、もうやりたい放題だ。……これ、帰つたらめちゃめちゃお袋に怒られるだろうな、俺……。

「つかまえた！」

「きやーー！」

俺は後ろから由美を羽交い締めにする。

由美は途中からきやつきやつきやつと嬌声をあげていた。

どうやら途中から「逃げている」のが「追いかけっこ遊び」に由美の頭の中で変換されたようだ。

三歳児エ……。

「きやはははは、おにいちゃんくすぐったーい！」

「え？ あ、すまん！」

いつの間にか両手が由美の胸に当たっていた。俺は慌てて腕を引っ込める。

これは事故だ。幸福な……じゃなかつた、不幸な事故だつたのだ。忘れよう。うん、そうしよう。

忘れようと思つても両手にいつまでも残つている柔らかい感触がアレなんだが……！

「こほん。さ、おとなしく病院行こう。な、由美」

「おなかすいたー！」

ああ、こいつ、次から次へともう……。

普段の優等生のあいつからは考えられない自由っぷりだな。まあ、今は中身が三歳だから

しようがないけど。

……でも、なんかこいつが心の底から無邪気に笑つたりするのを見たのつて、随分久しぶりの気がする。最近俺こいつに怒られてばっかりだつたからなあ。

……あれ、最後に由美の笑顔見たのつていつだつたつけ……？

「おなかすいたおなかすいたおなかすいたー！」

「あー、わかつたわかつたわかつたーー！」

ソファの上でばたばたと手足を動かして駄々をこねる由美。……ばかやろう、今パンツがちらつと見たじゃねえか！ つたく！

俺は急いで視線を逸らすと冷蔵庫の中からプリンを出してやつた。確か由美の好物のはずだ。

「わー、ぶつちんだーー！」

由美はきらきらと瞳を輝かせてテーブルにやつてきた。

「ね、ゆみにぶつちんさせて！ ぶつちん！」

「好きにしろよ……」

言うが早いが、由美はプッチンプリンのふたを開けて皿に伏せた。

「えーい、ぶつちーん！」

ぶるん、という感じでプリンが皿に着地する。が早いが、由美はもうぱくぱくと食べ始めていた。

「あ……」

「ん、どうした?」

由美が幸せそうに口に運んでいたスプーンを突然止める。

そのまま口をとがらせてしばらくプリンにらめっこした後、意を決した表情でこう言った。

「これ、はんぶんはたっくんにのこととく。だってすごくおいしいもの」

由美はとても真剣な目でそう宣言した。

まるで人生の岐路で重大な選択をするような真剣な面持ちだ。

う、いかん。

なんだかわからないけど、今ちょっと胸が熱くなつたぞ。

……おい、なんでもちょっとるつと来てんだよ、俺!?! おかしいぞ!?

「だ、大丈夫だよ まだ冷蔵庫に何個があるし、食べちゃいな」

「ほんと!?! じゃあたべゆー」

俺が内心の動揺を悟られないように早口でそう言うと、由美はにはつと天真爛漫な笑みを浮かべて残り半分のプリンに取り組み始めた。

……可愛いなあ……。

つて何考えてるんだ、俺は!

「なあ」

「むにゅ?」

口をもぐもぐさせながら由美がこちらを見上げてくる。

「その……たっくんってやつのこと、由美はそんなに好きなのか?」

「うん、だいすき!」

即答だ。

しかもド真ん中ド直球。

まぶしい……由美の笑顔がまぶしすぎて直視できない……。

「ゆみ、たっくんがいすきだからずつといっしょにいるの! ゆみ、たっくんのおよめさんになるの!」

「ぶーつ!」

由美からのストレートな追撃。

コウカ ハ バツゲン ダ!

俺は思わず飲みかけの麦茶を全部吹いてしまった。

「あのねえ、たつくんはね〜、ゴウちゃんがゆみをいじめてるときには〜、たすけてくれたんだよ。それでね〜、ゴウちゃんがひどいことしたあたしのおにんぎょうさん、ちゃんとおしてくれたんだよ。だからだいすきなんだよー！」

「あ……」

思い出した。

さつきのへちゃむくれの人形。

ゴウのやつが由美が大事にしてた人形をめちゃめちゃにちぎったから、残ったパーツをなんとか組み合わせて俺が縫い合わせたやつだ……！

母親に教わりながら慣れない針仕事をしたせいで、両手が絆創膏ばくそう膏だらけになつたけど、由美がめちゃめちゃ喜んでくれて、こつちもめちゃめちゃ嬉しかつたつけ。ほんとにぶつさいくな人形になつちやつたけどな……。

……十数年忘れてたのに、なんで急にこんなこと思い出したんだろう……。

「りょうさいけんば！」

「ん？」

「ゆみねえ、たつくんのおよめさんになつて、それからりょうさいけんばになるの！ ママがそれがいちばんだつていつてたの！」

「そつか……うん、お前ならなるよ。由美は頑張り屋さんだもん」

「うん！」

つい由美の頭を撫でてしまつ。由美はにぱつとした笑顔で嬉しそうに頷いた。

ああ、口の周りプリンだらけじゃねえか。しょうがねえな。

由美の口を拭きながら俺は思つ。

そうか。お前、俺のこと好きで……つまり心配で……だからあんなんに怒つてくれてたんだよな……ごめんな、気がつかなくなつて……。

「あのさ、由美……」

「くー……」

見ると由美はテーブルに突つ伏して穩おだやかな寝息をたてていた。

おなかもいつぱいになつたら眠くなる、か。本当にわかりやすいな、三歳児。

俺は由美を起こさないように、そつとソファに横にならせて、毛布を一枚かけてやつた。

そして由美が静かな寝息を立てているのを確認してから、床に転がつたままになつていたへちやむくれ人形をそつと拾いに行く。

「ほんとひでえ顔だな、お前。……でもよこれもなくて、きれいだよな、お前。……きっと由美が大切にしてくれてるんだろうな、うらやましいぜこの色男……」

呟いて、俺はそつとそれを由美の鞄かばんの中に戻しておいた。

「むにゅむにゅ…………んー…………あれつ!」

「おう、起きたか、由美」

「……居間？」

「由美はソファから上体を起こしてあわててきょろきょろと周囲を見回す。

「お、由美、お前戻ったのか!?」

「戻った…………? なにが?」

「あ…………いーやいや、なんでもないなんでもない、こっちの話」

「なによーなんか隠してるでしょ!? あやしいわねー!」

「まあまあ。そんなことより起きたんだったら、こここの間10教えてくれね? ここだけさつき

からどうしてもわからんねーんだよ」

由美の動きが完全に止まる。

「たっくんが自分から勉強してる…………!」

「なんだよ、その天然記念物でも見るような目は」

「だつてたっくんが自分から勉強してるんだよ!? 砂漠にスコールが降るようなもんじやない!」

「失礼なこと言つてんじやねーよ! 僕だつて勉強ぐらい自分でするわ! あと……」

「あと?」

「ありがとな、由美」

「!」

またもや完全停止した由美。その目が驚きにまあるく見開かれていく。

「どうしたの、たっくん! 热もあるの!? たっくんがあたしに……あたしにお礼言うなん

て!?」

「あー、もうなしなし! 今のはなし! さつさと間10教えてくれ!」

「ねえ」

「なんだよ」

由美が上目遣いでこちらにすり寄つてくる。
「もつかい言つて!」

「はあ!?」

「もつかい『ありがとう』つて言つて!」

「うん!」

由美は満足そうな笑顔を浮かべて、問10の解説を始めてくれた。

鞄の隙間からこつちを見て いるへちやむくれの顔も心なしか、笑顔に見えた。

おしまい